

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (24)〉

# 多様な機能をもつ幼少年期教育・保育施設

— フランクフルト市における

陶治ネットワークの活用実態 (2) —

大戸美也子

陶治ネットワークの活用実態 (その二)

三. KITA 53 における

健康・栄養プロジェクト

|| 手・足を中心とした活動

KITA 53 は、フランクフルト市の西の郊外にある大きな病院の高層職員住宅に隣接し、外国人市民の多くに住むアパート群にも近いところから、子どもたちは

両方の住宅から通っています。この施設の特徴は、五年ほど前から子どもたちの健康と栄養への関心を育むためのプログラムを發展させてきたことです。

私たちが訪れた日は、男女各四名の五歳児を対象に二人の専門保育者による「手と足の活動」を展開していました。大きな部屋にはアロマの香りが漂い、トルコ風のランプや湯沸しが幾つも配置され、通常の保育室とは異なるエキゾチックな雰囲気です。八人の子どもたちは、大きな籐製の長椅子に座って待つており、

まずリンゴジュースを手渡され、それを飲み干したところから活動が始まりました。

専門保育者「みんな、手を出してみて。指にはどれも

名前が付いているけど。知ってるか

な？」

子どもたちは、「親指、人差し指、中指……」と自分の指を指さしながら名前を言っていく。一人の女児が「私、指の歌を知っている」と言っていた。

専門保育者「ありがとう。指にはみんな違う名前が付

いているのね。親指はこのようにぐるり

と一回りできるけれど、ほかの指は前に

しか動きません。もしこの親指が動か

くなると、どうなるかな？」

こう言いながら、専門保育者は子どもたちの親指を粘着テープで固定していく。それが済むと一人ひとりにコップを手渡して「持ってごらん」という。どの子どもも四本の指できこちなく抱えるように持った

り、二本の指で挟んで持つ。保育者は、「親指が動かないと、とても不便ね」と言ってから、次に足の指で小さなプラスチックの塊を挟んで籠へ入れる活動をする。その後、保育者は折り尺を長く伸ばして「これ何だと思う？」と問いかける。

専門保育者「これはね、世界で一番長く伸ばしたイン

ド人の爪の長さなの」

子どもたち

は驚いて、手

を伸ばして長

さを測ったり

する。こうし

た活動を終え

たあと、女児

は「足の活

動」(写真

1)、男児は

「手の活動」



▲写真1 足湯に浸かる女児



▲写真2 手形をとる男児

(写真2)に

分かれて、本日  
の主題活動  
に入る。

女児たちは

アロマの入っ

た足湯に浸っ

た後、一人ひ

とり爪の手入

れをしてもら

う。足の手入

れを終えると、大きく波打つような椅子に寄りかかり

ながら、すねにローラをかけゆつたりと寛ぐ。

男児四人は、別の専門保育者と担任保育者の手を借

りつつ、手形を取るために石膏こうを含んだ包帯の切れ端

を何枚も指に重ねる作業を始める。少し前まで落ち着

かずにいた男児も、いつしか静かに作業に打ち込んで

いる。

部屋の雰囲気といい、次々に展開する活動には、本

当に興味津々でした。そして、こうした手・足をめぐ

る気持ちのよい体験や客観視する体験が、自らの手・

足への関心を高め、それらを大切に扱う原体験となっ

ていくこと、つまりは「予防」の発想のあることがう

かがわれました。このことをフランクフルト市学務局

就学前教育担当官のシュポークェット女史に確かめる

と、彼女は大きく肯いて「その通りです。子どもたち

の中には、お風呂に入る機会が限られていたり、手足

をきれいに洗う習慣をもたない子どもたちもいます。

こうした活動を通して、自分の手足への関心を高め、

これらを癒す手立てを幼いうちから身に付けることが

できるのです」。

このプロジェクトは、シュポークェット女史を中心に

八人の保育者らと開発し、二〇〇四年度のドイツ予防

教育賞の候補にノミネートされ、八百を超える応募の

中から、上位十位に選ばれたそうです。この施設には

ネイリストや栄養士の資格をもつ専門保育者が常駐し、健康プロジェクトの拠点施設として地域のほかの施設にも開放されているということでした。

#### 四. ドイツ映画博物館での

#### フィールドワークと

#### 陶冶工房の活動

フランクフルトの街を南北に二分するメイン川の南岸は、通称博物館通りといわれ幾つもの博物館が並んでいます。ドイツ映画博物館は、ウインターメイン橋を渡りきったところにあり、金融街のモダンなビル群と川を挟んで向き合うように建っています。この博物館には、撮影技術の進化をたどる古い機材が常設展示されているほか、年に数回、特別展示や博物館所蔵のお宝映画の上映も行われています。私たちが訪れたときには「アニメ」の特別展が開催中で、正面入り口ホールには、大きなトトロのぬいぐるみが置かれました。

私たちが博物館に到着したときには、すでに五歳児八人と男性の専門保育者や学芸員、保育者が二階の展示室の入り口に仕掛けられた大きな合わせ鏡の前で多重に映る自分たちの姿を楽しんでいました。

最初の展示は各種の万華鏡で、子どもたちは実際に手に取っていろいろな模様を楽しみ、次に「映像」を動かすいろいろな工夫も実際に手に取って試していきます。紙の表裏に二種類の絵を描きそれを急ぎ回転させて動画にする手法や、本の端に描いた絵を早送りさせて動画にする手法は、私自身子ども時代に楽しんだものですが、これらが世界共通の動画の楽しみ方であることを知り感慨を覚えました。

部屋を進むにつれ、次第に動画の仕掛けが大きく手の込んだものになっていきます。専門保育者は、円盤に絵や模様を描いて回転させて動画にする仕掛けや、大きな円筒を動かして中心に描かれた馬の映像を動くように見せる仕掛けなどを、一人ひとりの子どもたち

に説明しながら見せていきます(写真3)。



▲写真3 昔の動画の仕掛けを見る子ども

展示を見た後、入り口近くに設けられた陶冶工房に入り、専門保育者の説明を受けて実際に動画作りに取り組みます。紙に二種類の絵を描きそれ

を貼り合わせて、紙の両端に穴を開けそこに輪ゴムを通すだけの簡単な作業ですが、輪ゴムをしつかり巻き上げてからぎゅつと横に延ばすと、瞬間に動画を楽しむことができます。

この一連の作業を終えると、子どもたちと引率の先生方にその日の活動の感想を所定の用紙に記入してもらい、活動を終了します。

子どもたちは園に戻ってから仲間に動画の作り方を教えたり、家で親兄弟に伝え、仲間や家族で休日に博物館を再訪する子どもたちも少なくないそうです。

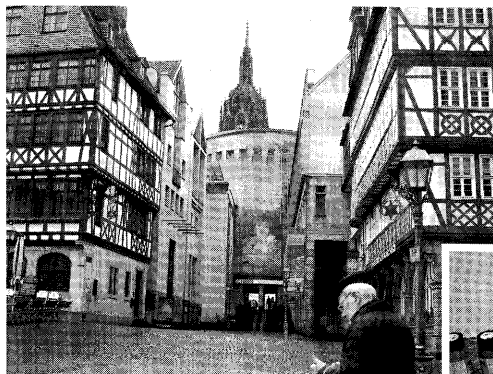
## 五. シルン美術館での

### フィールドワークと

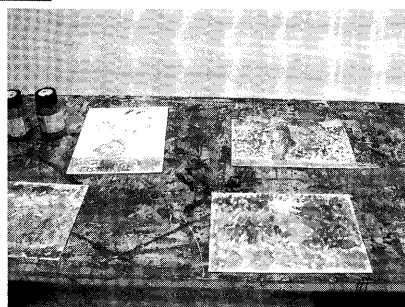
#### 陶冶工房の活動

メイン川沿いの美しい遊歩道を進むと、市の中心地につながる鉄製の橋、アイゼルナー・シュテーク橋にたどりつきます。この橋を渡ったところが旧市庁舎など観光名所の立ち並ぶレーマー広場です。シルン美術館はレーマー広場から一步入った所にあり、私たちが訪れたときには、「印象派の女流画家展」を開催していました（写真4）。そして、ここにも陶冶ネットワーク担当の学芸員がおり、この日の午前に子どもたちが美術館で展開した活動を具体的に説明してくださいました。

印象派といえば、光とその移ろいやすさを描いたモ



▲写真4 レーマー広場からシルン美術館を望む



▲写真5 子どもたちの点描画

ネ、ピサロ、コロドーといった画家の名前はすぐに浮かびますが、女性の画家となると全く不明でしたので、一八〇〇年代後半の女性画家の特色を知るよい機会ともなりました。印象派の男性画家が積極的に屋外で活動を展開したのに比べ、女性画家は庭や窓から居間に差し込む光を描き、また何よりもわが子の遊ぶ姿や寝姿、そして室内の様子を描いているところに特色が見られます。このような絵画は、子どもたちも親しみを感ずるに違いな思われました。

学芸員は、子どもたちに理解でき、なおかつ印象派らしい絵画を選択して、直接絵を見ながらその絵の特徴を説明します。そして、絵画鑑賞の後には、陶冶工房で子どもたちに今見てきた印象派の点描画を実際描いてみる機会を与えるのです(写真5)。ここにも、直接体験の重要性とともに、見て感じ、思ったことを主体的に体(手)を使ってフィードバックし、理解を深める過程が尊重されており、こうした学習のスタイルこそ陶冶(Bildung)といえるかと納得しました。

## 六、音楽教室との陶冶ネットワークと

### その活動

フランクフルト市の陶冶ネットワークのうち、芸術と運動部門は、市学務局のクレインシュミット氏が担当しています。私たちは、彼の案内で街の東北部にある公園の旧温室で開かれたミニ・コンサートを聴きに出かけました。地域の音楽教室の生徒たちが、同じく地域の子どもたちや保護者の前で、自分の好きな楽器―ピアノ、ヴァイオリン、ギター、チェロなど―を使って日ごろの練習の成果を発表する会で、日本の音楽発表会の様子とはだいぶ異なっていました。

楽器の種類がいろいろなこと、演奏する側も聴く側も普段着でリラックスしていること、また演奏の合間に楽器のことや曲目について指導者と観客の間で対話のあることなど、演奏する側と聴く側との垣根を低くし、音楽を生活の中の身近なものにする努力が払われていて興味深く思いました(写真6)。



▲写真6 音楽教室の発表会

## 陶冶ネットワークと陶冶工房から学んだこと

フランクフルト市の陶冶ネットワークと陶冶工房を活用した諸活動を訪ねて、陶冶(Bridging)の概念は教育と保育とは異なる次元の活動であることが次第にはっきりしてきました。

これまで紹介してきた陶冶活動には幾つか共通点が見られます。第一に、本物に触れる直接体験を重視していること。第二に、直接体験から五感を通して触発された新たな興味や好奇心を満たし、次の学習へのステップにしていくフィードバック活動に力を入れていくこと、です。こうした活動を具体化する条件として、市内のさまざまな文化財や施設とネットワークを結びアクセスできる組織をつくる一方で、専門的知識を子どもにも消化できる形で伝える専門保育者の養成が始まり、また体験で得たものを確かなものにする陶冶工場の設置が進められました。

もう一つ特徴的なことは、少人数制による活動の展開であることも見逃がせません。子どもの内的世界をつくるプロセスにかかわるために、陶冶活動では一人ひとりの発言に耳を傾け、異なる関心にていねいに応える保育者の姿がありました。あえて、少人数制を採用する理由は、陶冶活動の達成に役立つのはもちろんですが、内的世界を形成した子どもたちが自らの学びを伸

間や家族に伝えることで、自らの学習を一層確かなものに行けると同時に、一つの学習の成果をクラス中に波及させる働きにも注目しているためなのです。

ドイツは、人的流動の激しいグローバル社会が既に到来している複雑な社会を維持し発展させるために非常な努力を払っています。<sup>※</sup>その一つが、幼少年期向けの多機能施設KITAの創設であり、陶冶の概念はその指導概念として導入されました。多文化共存の中心に個性的な自己形成を据えて真摯な努力を始めています。私たちの周辺に居る子どもたちも、やがてはグローバル社会の一員として活躍することを思えば、日本の保育者もまた個性的な自己形成を目指す陶冶活動に無関心ではいられないと思います。

(お茶の水女子大学 チャイルド・ケア・アンド・

エデュケーション講座)

註

濱口・クレナー牧子教授(ボフム大学)との対談と、その娘F・クレナーさんのレポートから多くの示唆を得ました。